様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２３８０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2016
課題番号：２４７２０１５５

研究課題名（和文）日本におけるフェデリコ・ガルシア・ロルカの受容研究 - 戯曲を中心に -

研究課題名（英文）Reception of the Federico Garcia Lorca's theatre in Japan

研究代表者
森　直香（Mori, Naoka）

静岡県立大学・国際関係学部・講師

研究者番号：６０６１１８２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はフェデリコ・ガルシア・ロルカ（1898～1936年）の日本における作品受容についての初めての体系的研究である。具体的には日本で出版されたロルカに関する出版物を参照しながら戯曲を中心に、1）受容を概観し需要を推し進めた要因について検討し、2）日本人読者が何を期待して作品を読み、解釈したかについて考察した。その結果、1）については①スペイン国外で作品が高い評価を受けていたこと、②新劇の劇団による戯曲の上演、③『ロルカ選集』の刊行の3点が指摘できた。2）については、日本人読者がロルカ戯曲の①スタイルの新しさ、②詩的言語、③スペイン性、④悲劇的世界観に特に魅力を感じていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Here we achieved the pioneer task of completing a systematic study on the reception in Japan of the works of Federico Garcia Lorca. Through the analysis of various Japanese publications on Lorca, such as articles, essays and reviews, we identified the main elements linked to Lorca’s reception in Japan, as well as the way his works were interpreted by this particular readership.
As research fruits, we can point out three main factors that favored the above-mentioned reception: the good reputation Lorca’s works enjoyed outside Spain; the premiere of his plays; the publication of The Selected Works in 1958 -1959. As for the interpretation of his works, our study establishes four main aspects in Lorca’s works that captured the attention of Japanese readers: an innovative style which, combined to the use of visual effects, seems to somehow highlight movements and words; the use of poetic language; the presence of essentially Spanish elements; his tragic vision of the world.

研究分野：スペイン文学

キーワード：フェデリコ・ガルシア・ロルカの戯曲　ロルカ作品の受容　ロルカの悲劇的世界観

１．研究開始当初の背景

本研究は、スペインの詩人・劇作家フェデリコ・ガルシア・ロルカ（1898~1936）の作品の日本における受容についての初めての体系的研究である。

近年、文学研究において受容者の側からも文学史を検討することの重要性が認識され、ロルカ研究の分野でもその試みが始められている（Castillo Lancha, Marta, *El teatro de García Lorca y la crítica: Recepción y metamorfosis de una obra dramática (1920-1960)*, Centro Cultural Generación del 27, Málaga, 2008; Vilches de Frutos, María Francisca, y Dru Dougherty, *Los estrenos teatrales de Federico García Lorca (1920-1945)*, Tabapress, Fundación Federico García Lorca, Madrid, 1992; López Recio, Virginia, *La recepción de Federico García Lorca en Grecia: el caso de Bodas de sangre*, BPR Publishers, Granada, 2008, 344pp.;Torres Monreal, Francisco, "El teatro de García Lorca en Francia (1938-1973)", *Estudios Románicos,* núm. 5, 1987-1989, pp. 1346-1369 ほか)。しかしながら、日本においては、何人かの研究者が受容研究を手がけているものの（平井うらら「ロルカの戯曲作品の日本への移入について：導入初期（1952 年ー1959 年）を中心として」*Mare Nostrum*, 12, 1999 年、pp. 64-79；古家久世「日本におけるスペイン文学（II）：ガルシア･ロルカを中心に」『環日本研究』7、2000 年、pp. 30-45 ほか)、書誌研究のレベルを出ておらず、受容過程についての体系的で詳細な研究はいまだ存在していなかった。

２．研究の目的

ダムロッシュは世界文学を「翻訳であれ原語であれ、発祥文化を超えて流通する文学作品」と定義し、文学作品は、文学として読まれ、さらに発祥言語と文化を超えて多くの点でいっそう豊かになっていくものだとも述べている（『世界文学とは何か』秋草俊一郎ほか訳、国書刊行会、2011 年、p. 14)。本研究では、ロルカ作品の日本での受容の過程を戯曲を中心に検討し、受容を推し進めた要因と日本人読者の解釈について考察した。以上を通してロルカ作品が国境を超えることで獲得した新たな価値を明らかにした。

３．研究の方法

書評・劇評・論文など日本で出版されたロルカに関する出版物を参照し、作品受容を概観する。さらに日本人読者が何を期待して作品を読みどのような点に注目しているかを分析した。

また、日本人が解釈において注目する点がロルカ作品において具体的にどのような形で表れているか、青年時代の著作を中心に検討した。

４．研究成果

1）受容概観

初めてロルカの作品が日本に紹介されたのは、1930 年の笠井鎮夫による"Canción de jinete"（*Canciones* に収録）の訳詩「馬賊の歌—1860 年のこと」であった（『詩神』第 6 巻 1 号、1930 年、pp. 89-90)。また、ロルカとグラナダ大学で共に学んだ友人ミゲル・ピサロ・サンブラノは、1922 年から 1933 年まで大阪外国語学校（現大阪大学外国語学部）にスペイン語教師として赴任したが、彼は学生たちにスペインが誇る詩人兼劇作家としてロルカのことを盛んに紹介していた。

その後、第二次世界大戦などの要因もあり、1943 年のルイ・パロー『スペイン文化史概観』（西海太郎訳、アルス pp. 196-202）のなかで 7 ページに渡りロルカの生涯と作品の外観に触れてあるのを除き、1950 年代までロルカの名がわが国で紹介されることはなかった。

戦後、1952 年に内村直也が雑誌『悲劇喜劇』に寄せた記事でロルカの『ベルナルダ・アルバの家』の筋を詳しく紹介し（「ベルナルダ・アルバの家」『悲劇喜劇』6・7 号、1952 年、pp. 26-31)、翌年には会田由が『イエルマ』の翻訳が出版した（「イエルマ－悲劇詩」『現代世界戯曲選集 IV　南欧北欧篇』、白水社、1953 年、pp. 1-57)。これを皮切りとして、日本でも作品が多く紹介されるようになり、三島由紀夫、長谷川四郎、木下順二などの日本を代表する作家をはじめとした多くの読者を惹きつけ、ロルカはセルバンテスと並んでわが国で最も読まれているスペイン人作家の 1 人となった。

2）受容を推し進めた要因

このようにロルカ作品の受容は初期受容期である 1950 年代に急激に進んだが、受容を推し進めた要因については以下の 3 点が指摘できる。

1）スペイン国外、とくにフランスでロルカ作品が高い評価を受けていたこと。
2）ロルカ戯曲の上演。
3）『ロルカ選集』（全 3 巻と別巻、小海永二ほか訳、書肆ユリイカ、1958～1959 年）の刊行。

ロルカ作品の初期受容期には、ロルカに関する情報はスペインから直接入って来るのではなく、フランスやイギリスなどの第三国を介して入ってくることが多かった。スペイン文学者会田由を除いては、ロルカに関する出版物はスペインとはあまり関係を持たない、スペイン語を理解しない人物、とくにフランス語関係者の手によることが多かった。たとえば、1958 年に出版された『ロルカ選集』に収められた作品の大半は、フランス語か英語からの重訳であった。

この理由のひとつに、フランコ独裁政権下の当時のスペインでは、スペイン内戦ぼっ発直後にファシズム側の手によって暗殺されたロルカの話題は一種のタブーであったことが挙げられる。その一方で、フランスをはじめとする諸外国では作品を高く評価する動きがあった。たとえば、サガンの翻訳で知られる朝吹登水子はパリでロルカ戯曲の上演を見たときの感動を「パリで観たロルカの芝居」という記事に書き記し、自分は「ロルカの芝居に触れた最初の日本人だったかもしれない」と述べている(『新劇』28・7 月号、1956 年、pp. 75-83)。同じころ、劇作家、木下順二もパリでロルカの芝居を観たと書き残している(「パリのロルカ」『ぶどうの会通信』1956 年、『木下順二評論集 4　1956-1957』未来社、1974 年、pp. 242 – 245 に再録)。こうしてスペイン以外の国を介して日本に届いたロルカの評判であったが、その作品に日本人読者が直接接することを可能にしたのが新劇の劇団によるロルカ戯曲の上演と『ロルカ選集』に収められた翻訳であった。

日本でのロルカ作品の上演は新劇の劇団によって盛んに行われた。戦後、活動を再開した新劇の劇団は、戦前からの流れを受け継ぎ、写実主義・自然主義の翻訳劇を多く取り上げていたが、西洋の社会現実をありのまま映し出す表現を日本の舞台に掛けることに限界を感じていた。そんな中、少なからぬ演劇人がこれらの作品とは一線を画すロルカ戯曲に注目し始め、1950 年代に多くの作品が上演されることになった。

『ロルカ選集』は 1958 年に書肆ユリイカから全三巻と別巻『ロルカ研究』という形で刊行された。収録された作品のほとんどはフランス語、英語からの重訳で、スペイン語からの直接訳は羽出庭梟が担当した一部の作品のみであった。この点からも、日本におけるロルカ作品の受容の大半がスペイン以外の第三国を介してのものであったことがうかがえる。重訳であったにもかかわらず、この『選集』は広く読まれ、安部公房、三島由紀夫らの著名人も書評を著した(安部公房「『ロルカ選集』第二巻　戯曲編上」『日本読書新聞』1958 年 3 月 3 日号、『安部公房全集 8　1957．12－1958．6』新潮社、1998 年、p. 274 に再録。三島由紀夫、『裸体と衣装』新潮社、1983 年、pp. 14-17)。

3) 日本人読者の解釈

日本人読者の作品解釈については、日本人読者がロルカ戯曲に対して、1) 動き、せりふの様式化と視覚効果をはじめとした新しい様式、2) 詩的言語の使用、3) スペイン性、4) ギリシア悲劇的世界観に特に魅力を感じていることが明らかになった。

なかでも 4) 悲劇的世界観に表れるロルカ独自の死生観には興味が集まった。日本人読者によるロルカ死生観の主な解釈・態度は、以下の 4 点である。

①ロルカ自身の死を作品解釈と結びつける。
②死を描くことによって生の輝きが増すと考える。
③生と死の距離が近いと理解する。
④スペイン的とみなす。

①には、ロルカ自身の死が謎に包まれていることも関係している。実際のところ、読者の中にはロルカの死を作品と結びつける者も少なくなく、作者が自らの作品の中で予言していると考える者すら存在する。これには受容初期に日本に紹介されたフランス人研究者フランソワ・ヌリシェの手による『劇作家フェデリコ・ガルシア・ロルカ』(François Nourissier, *Federico García Lorca, dramaturge* , L´Arche, Paris, 1955) の影響が指摘できる。この研究書はフランスで出版されるとすぐに日本でも評判となり、その後、ロルカの死について述べた章がロルカ選集の別巻『ロルカ研究』に収められた(前掲書、pp. 111-130)。

②についてであるが、ロルカ作品の世界においては本当に生きるためには死を受け入れるか、あるいは死に立ち向かわなければならないのだと理解する日本人読者も多い。ロルカは講演「ドゥエンデの理論とからくり」でスペインにおいて死は終わりではなく、生き生きとしたものだと述べているが、このような思想が作品に反映されていると日本人読者は解釈している。

一方で、ロルカは死を残酷なものとしても描いており、たとえばそれは『血の婚礼』の母親の死への恐れに顕著である。しかし、日本では作品に表れる死の残酷な面はあまり注目されず、生き生きとした面に興味が集中した。これには、日本人の死生観が関係していると考えられる。日本人の死に対する態度には、あきらめの姿勢があることが多くの研究者によって指摘されているが、ロルカ作品の死に立ち向かう態度はこれとは対極に位置するもので、それゆえ大変魅力的に映ったと思われる。加えて、死を通じて生や存在を意識するというのは日本文学において伝統的に好まれてきたテーマであり、ロルカ作品のこのような死生観は日本人読者にとって全く異質のものではなかった。

③については、日本の伝統的な死生観が生と死が近いというロルカ死生観を受け入れやすいものにしたと考えられる。日本では古来から生者の世界と死者の世界を近いものとらえており、たとえば、島根県八束郡東出雲町の黄泉比良坂など、死者の世界へつながる入口があるという伝説が各所に残っている 。さらに、死者を家族、共同体の構成員ととらえる伝統があり、それはお盆などの習慣にも顕著である。

④についてであるが、前述したように日本人はロルカ作品のスペイン性に惹かれていたが、日本人がスペイン的と捉えるものは、ジプシーやアンダルシアの風俗のみでなく、死生観をはじめとする世界観も含まれている。西洋では、ロルカの世界観は原始的、前キリスト教的、あるいはギリシア悲劇的とは評されるが、必ずしもスペイン的とは受け止められておらず、この点は大変興味深い。

4）青年期の作品における悲劇的世界観

前項で指摘したようにロルカの悲劇的世界観は日本人読者を大いに引き付けた。このような世界観の萌芽はロルカの青年期の作品にすでにみられる。これらの作品は、完成度はその後の作品には劣るものの、このような世界観をより直接的な形で表現しており、その原形を探るにはこれらの作品の分析が不可欠である。しかしながら、現状ではこれらの作品に関する研究はわずかで、日本ではごく一部の作品が訳出されているのみであった。

青年期の作品、とくに戯曲において悲劇的世界観がどのような形で表現されているか検討した結果、このような世界観の根底には神への強い不信感が存在していることが明らかになった。そして、これは、1）神の残酷さと救いの不在の強調、2）神の全知全能の否定、3）神の存在を否定する登場人物の登場という形で表現されている。また、神に強い不信を抱く一方、ロルカはイエス・キリストに救いを見出している。救い主キリストのモチーフは『マリアナ・ピネーダ』のマリアナや『血の婚礼』のレオナルドなどその後のロルカ戯曲にも受け継がれ、作品を重ねるにつれ犠牲のイメージが強調されていくことになる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）

① Naoka MORI, “ La visión trágica del mundo en las obras inéditas de juventud de Federico García Lorca”（フェデリコ・ガルシア・ロルカの青年時代の未刊行の作品群における悲劇的世界観、査読あり）, *Cuadernos CANELA*, núm. 28, 日本・スペイン・ラテンアメリカ学会（CANELA）2017, pp. 21-38。

② 森　直香「ロルカの死と日本における作品解釈」（査読あり）、『REHK 京都イスパニア学研究会記念論文集』、京都イスパニア学研究会、2016 年、pp. 161-174。

③ Naoka MORI, “Japón y la muerte de Lorca: la creción de imagen trágica”（日本とロルカの死：悲劇的イメージの創造、査読あり）, Ricardo de la Fuente Ballesteros, Jesús Pérez Magallón y Francisco Estévez (eds.), *La tragedia del vivir: dolor y mal en la literatura hispánica*, Editorial Verdelís, Valladolid, 2014, pp. 231-248.

④ Naoka MORI, “La recepción de *Bodas de sangre* en Japón”（日本における『血の婚礼』受容）, *Presencias japonesas: la interacción con Occidente en la literatura y las otras artes*, Ovidi Carbonell I Cortés (ed.), Ediciones Universidad de Salamanca y los autores, Salamanca, 2014, p. 131-140.

⑤ 森　直香「日本におけるフェデリコ・ガルシア・ロルカ作品の初期受容概観」（査読あり）『スペイン現代史』第 21 号、スペイン現代史学会、2012 年、pp. 25-37。

⑥ Naoka MORI, “Lorca y Mishima”（ロルカと三島、査読あり）, *Hecho teatral*, núm. 12, 2012, pp. 485-511.

〔学会発表〕（計　5 件）

① 森　直香「フェデリコ・ガルシア・ロルカ（1898～1936）の日本における受容研究」静岡県立大学広域ヨーロッパ研究センター2016 年度第 4 回研究会、2017 年 1 月 24 日、於　静岡県立大学。

② Naoka MORI, “La visión trágica del mundo en las obras inéditas de juventud de Federico García Lorca”（フェデリコ・ガルシア・ロルカの青年時代の未刊の作品における悲劇的世界観）、日本・スペイン・ラテンアメリカ学会（CANELA）第 28 回大会、2016 年 5 月 15 日、於　在日本スペイン大使館。

③ 森　直香「日本人読者の読むロルカの死生観」京都イスパニア学研究会　第 22 回大会、2013 年 12 月 8 日、於　京都キャンパスプラザ。

④ Naoka MORI, “Japón y la muerte de Lorca: la creación de imagen trágica”（日本とガルシア・ロルカ：悲劇的イメージの創造）、“La tragedia del vivir: dolor y mal en la literatura hispánica”（国際学会「生きることの悲劇：スペイン語文学における苦悩と悪」）、マギル大学（カナダ）、ウニベルシタ・カステリャエ（スペイン）共催。2013 年 6 月 26～28 日、於　バリャドリード。

⑤ Naoka MORI“La recepción de *Bodas de sangre* en Japón”（日本における『血の婚礼』受容）、 el XIX Simposio de la Sociedad Española de Literatura General y Comparada (SELGYC)（スペイン文学・比較文学学会 SELGYC、第 19 回大会）、2012 年 9 月 21 日、於　スペイン国立サラマンカ大学。

〔その他〕

翻訳

① 「フェデリコ・ガルシア・ロルカの青年時代の未刊の戯曲『愛について。動物たちの戯曲』『亡霊たち』『エホバ』」森　直香訳『国際関係・比較文化研究』第 14 巻第 2 巻、静岡県立大学国際関係学部、2016 年、pp. 1-26。
② 「ロルカ・青年時代の未刊の戯曲『観念的小コメディア』『魂の戯曲』『魂の演劇—霊的生活の風景—』」森　直香訳『スペイン学』第 14 号、京都セルバンテス懇話会、2012 年、pp. 141-151。

６．研究組織

⑴研究代表者

森　直香　（MORI, Naoka）
静岡県立大学・国際関係学部・講師
研究者番号：60611829